

# 昇栄した地球はどこに行くのか？

1935年、物理学者であるアインシュタインとローゼンがアインシュタイン・ローゼンブリッジという理論を提唱しました。これが世に言う「ワームホール」です。宇宙の正体は時空であるため、時空と時空を穴のようなものでつなぎ合わせると遥か彼方の宇宙にも一瞬で到達できる可能性があるという考え方でした。

2026年に私はイザヤ書の研究中に奇妙な矛盾（のようなもの）を感じていました。それは

① 宇宙全体に90個ほどの元素しか存在しないこと

と、

② 宇宙全体において過去に昇栄に至ったであろう惑星を全宇宙内に確認できないこと

です。

まず聖典の中にはこのように書かれています。

「人は霊である。元素は永遠であり、分離しないように結合した霊と元素は、満ちみちる喜びを受ける。」(DC93:33)

つまり、ここで言われている「元素」というものは永遠の存在であるということです。現在私たちが確認している元素は118番までですが、このうち自然界に存在するのは94個（通常92番のウランまでだが、93番のネプツニウム (Np) と94番のプルトニウム (Pu) がウラン鉱石の中で極めて微量に生成されることがある）。残り24個は人工的に生成されたもので、瞬時に崩壊して持続して存在ができません。物理の理論上は173番までは生成が可能と考えられていますが、実際には原子核の周囲の電子が安定せず崩壊するため、理論上全宇宙に持続して存在できる元素は92-94個だと断言することが可能になります。

しかし、これら94個の元素も構成上、永遠に存在することはできません。膨大なエネルギーと時間の前にはやがてどんな元素も崩壊します。

「また、人も、野の獣も、空の鳥も、海の魚も、全地の面に住んでいるすべての朽ちるものが焼き尽くされる。元素から成るものは酷熱に溶かされる。そして、万物が新しくなって、わたしの知識と栄光が全地のうえにある。」(DC101:24-25)

では永遠に生きるための復活したときの体を構成する、この宇宙に存在しない決して崩壊することのない「永遠の元素」はどこに存在するのでしょうか？

「日の栄えの霊を持つ者は、肉の体であったその同じ体を受けらるであろう。すなわち、あなたがたはあなたがたの体を受け、またあなたがたの栄光は、あなたがたの体が生かされるその栄光である。」(DC88:28)

ここで言う「同じ体」とはあきらかに同じ形、同じ姿のことを表して、同じ元素で構成されている体のことではありません。私たちが聖典から理解し、自らの口で「不完全な肉体」と呼ぶ現在の元素構成の体では永遠に存在することも、神の栄光（すなわち膨大なエネルギー）をその身に宿すこともできないからです。

前世での私たちは初めも終わりもない永遠の存在の元素である「英知」あるいは「霊」として存在していました。

「とはいえ、主はさらに大いなる星を造った。同じように、もし二つの霊がいて、一方が他方よりも英知に優れているとしても、一方が他方よりも英知に優れているにもかかわらず、これら二つの霊には初めがない。彼らは以前に存在しており、彼らには終りがなく、彼らは後にも存在する。彼らはグノーラム、すなわち永遠だからである。」(アブラハム 3:18)

これらの英知はやがて不死不滅の崩壊することのない元素によって構成された器としての肉体を得て満ち満ちる喜びを受けます。そして、試練に耐え、最後まで頑張り抜いた者には「永遠の生命」すなわち、神様の膨大なエネルギー（創造の力）を譲り受け、神に等しい存在になることができます（昇栄）。

「見よ、人の**不死不滅と永遠の命**をもたらすこと、これがわたしの業であり、わたしの栄光である。」(モーセ 1 ; 39)

モルモンははっきりと、今の肉体を構成する元素と私たちが復活する時に得られる体を構成する元素に違いがあることを説明しています。

「あなたがたの死すべき体が不死のものを着て、今朽ちつつあるこれらの体が朽ちない体になる日がもうすぐ来る。」(モルモン 6:21)

ではこの朽ちることのない、永遠の肉体を構成するための元素はどこにあるのでしょうか？ 残念ながら、物理の法則が存在するこの宇宙にはどこにもそれを見つけることはできないのです。しかし、神様が言われることは真実であり、それはどこかに存在するはずなのです。

ではその答えを探すために私が抱いたもう一つの質問について考えてみます。聖典の中ではこの地球が生きていて、やがて昇栄を受けることが述べられています。

「問い。黙示録第四章六節でヨハネにより述べられている**ガラスの海**とは何か。  
答え。それは**聖められた、不滅かつ永遠の状態にある地球**である。」(DC77:1)

「この地球は、**聖められて不滅の状態になると、水晶のようになり、そこに住む者たちにとって一つの「ウリムとトンミム」になる**。そして、これによって下位の王国、すなわち低位のすべての王国に関するすべてのことが、そこに住む者たちに明らかにされる。また、この地球はキリストのものとなる。」(DC130:9)

「それゆえ、**地球は日の栄の栄光に備えられるように、すべての不義から必ず聖められなければならない**。地球はその創造の目的を達した後、**栄光、すなわち父なる神の臨在を冠として与えられるであろう**。それによって、日の栄の王国に属する者たちが、とこしえにいつまでも、これを所有できるようにするためである。この目的でこれは造られ、創造され、またこのために彼らは聖められるのである。」(DC88:18-20)

さきほどモーセの 1:39 で神様は様々な世界を創造されたと説明されました。しかし、私たちは現在の技術で数億個の銀河を認識しており、そこから計算して 2 兆個ほどの銀河世界が存在すると推定します。しかし、その目視できる数億個の銀河の中には一つ一つに数千億から数千兆

もの恒星やそれに伴う惑星が存在するのに、光り輝く昇栄に成功した天体を確認することができません。

ここである物理の法則の限界点に注目してみました。それはどんなに科学が進歩しても人が光の速さに到達することはないし、光の速さよりも早いものが宇宙に存在できないということです。

無限に広がる宇宙にも限界が存在します。それが光の早さです。そして物理学的にはこの光の速さが一つの基軸となって、エネルギー、重力、空間、時間の存在を計算する数式に組み込まれています。つまり、光の速さとはこの宇宙の決められた一つの定数なのです。

なぜ人が光の速さに到達できないのか。それは簡単に数式で導き出すことができます。これはアインシュタインがたどり着いた一般相対性理論と呼ばれるものです、もっとも有名な数式が

$$E=mc^2$$

というもので、エネルギー(E)は質量(m)と光の速さ(c)の自乗をかけ合わせたもので計算できるというものです。

とても美しい宇宙の真理を表した数式ですが、これはあくまでも物体が動かない場合の数式です。

物体が動く場合（それが普通）はこうなります。

$$E = \frac{mc^2}{\sqrt{1 - \frac{v^2}{c^2}}}$$

一見難しそうに見えますが、実はいたって簡単です。先程の数式にvという物体が動くときの速度が加わっただけです。

そこでイメージしてもらいたいのですが、例えば貴方がロケットに乗っていて、光の速さに近づくことに挑戦しているとします。光の速さはcで表されるので、vがcになるようにするということですよ？つまり

$$\frac{v^2}{c^2}$$

の上の $v^2$ の部分が $c^2$ になるわけです。すると何が起こるか？この分数の上も下も同じcなので、 $c^2$ 分の $c^2$ 、つまり $c^2 \div c^2$ で答えは「1」になります。すると

$$1 - \frac{v^2}{c^2}$$

の部分「1-1」になってしまうので、この部分の答えが0になります。するとルートの中が0になるのでルート0は0ですから、全体の式が「 $mc^2 \div 0$ 」となってしまいますね。どんな数字でも0で割ろうとすると、その答えは「無限」です。ここで求められる答えはエネルギーですから、「光の速さに達するためには無限のエネルギーを要する」ということになります。無限のエネルギーというのは全宇宙のエネルギーよりも遥かに大きなエネルギーということです。どんなに科学が発達しても人間にそのエネルギーを生み出すことはできませんし、この宇宙に属する限り、どんなエネルギーを秘めた天体や存在もそのエネルギーの一部にしか過ぎないということになるので、この宇宙での移動速度は光の早さが限界点になり、そして私たちの力では光の速さには絶対に到達することができないということになります。

でも逆に言えば、「無限のエネルギーがあれば光の速さに到達でき、もしかするとそれを越えることができるかもしれない」ということになります。しかし、これは物理学の世界での定義を越えてしまうため、理論上存在できないことになっています。

そこで物理の世界ではたどり着くことができないある聖句に答えを探します。

「主なる神はモーセに言われた。『わたし自身に目的があつてこれらのものを造つた。ここに知恵があり、それはわたしの内にある。』」（モーセ 1:31）

すべての宇宙は神の手によって創造されたのであれば、神様はそれを創造するためのすべての材料を含めたエネルギーを持っておられることになります。

「全宇宙を超えるエネルギー」、それは人間の想像をはるかに超えたもので、今の物理学の世界ではおとぎ話の範疇です。しかし末日聖徒である私たちは宇宙を作られたのは神様であることを信じています。そこで、神様が全宇宙を超える、ある意味無限のエネルギーを持つ存在であると考へて現代の物理学がたどり着いている数式を当てはめてみるととても面白いことがわかります。

まず先程の

$$E = \frac{mc^2}{\sqrt{1 - \frac{v^2}{c^2}}}$$

という式の答えであるE（エネルギー）に無限（ $\infty$ ）を当てはめると、とりあえず、神様の質量（m）がどうであれ、一番簡単に答えのEを無限にする方法は速度（v）が光の速さに到達し、この数式の分母の下の部分が0になることです。つまり別の言い方をすれば「無限のエネルギーを有する神様は、光の速さで動くことができる」となります。

光の速さはあくまでも、この私たちが住む世界の限界点ですので、これに過去に遡れる時間軸のようなものが存在するとすれば、もしかすると全宇宙よりも大きなエネルギーを神様がをお持ちの場合、光の速さよりも早く動くことが可能になるかもしれません。

次に物体が動かない場合のエネルギーについてのみ考えると、一番はじめの

$$E=mc^2$$

の数式があてはまるのですが、エネルギー（E）を無限（ $\infty$ ）にするためには右側の式で変化することのできる変数は質量を表すmだけになります（Cは光速を表す定数なので変化できない）。

その上で答えのEが無限になる場合のmはなにかといえば、これも無限になります。無限のエネルギーは無限の質量によって生じるというわけです。

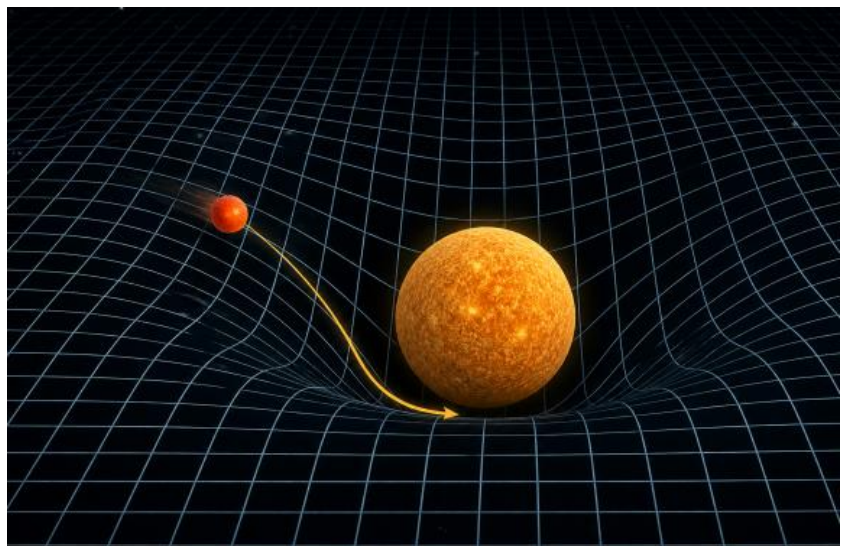
ここでとても不思議な解答に私たちはたどり着くことになります。それは

### 「神様は宇宙よりも重い存在である」

ということです。さて、なんとも不思議な結果になりました。私たちが持つ神様のイメージは天に浮かぶような存在ですから、「質量」として考える時に「軽さ」を想像してしまいます。しかし物理学的には神様は重い存在で無くてはならないのです。

しかし、安心してください。ここで言う「重い存在」というのは私たちの常識を遥かに超える重さであり、エネルギーの塊です。この重さがあるゆえに、神様は空中に立つことができ、空間を自由に行き来することができるのです。その理由を説明します。

アインシュタインは一般相対性理論を説明する時に宇宙は大きく広く張ったゴムシートのようなものだと説明しました。そのゴムシートの上にビー玉を置くとその重さでゴムシートは沈みます。その沈んだ部分に向かって別の小さなビー玉を転がせばやがてそのくぼみに捉えられて小さなビー玉は抜け出せなくなります。これが質量が生み出す重力です。質量がある恒星や惑星などの天体はその重さに応じて異なる重力を発生してものを引きつけます。ゴムシートに置かれる玉は重ければ重いほど深く沈みます。つまりそれはより大きな重力を発生させることを証明しています。

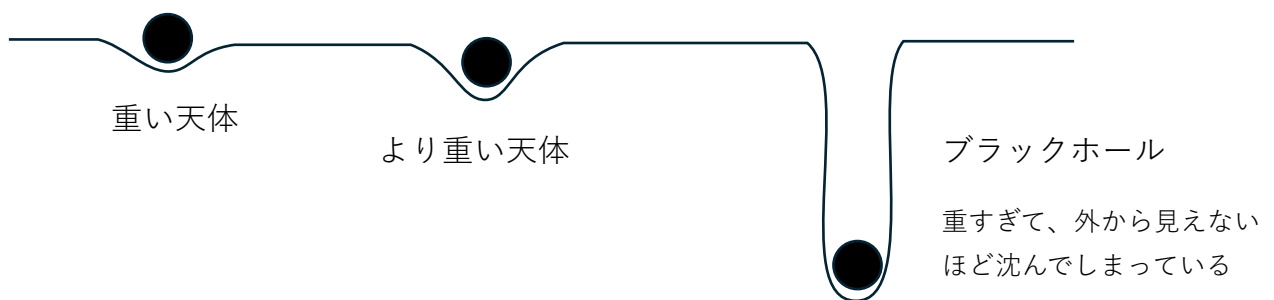


この歪は惑星の軌道を変化させるばかりか、光や時間まで変化させることができます。ですから、星々やそれぞれの惑星の上で流れる時間は地球とは異なり、それぞれの場所で変わります。このことはアインシュタインがこの相対性理論を提唱するずっと前からジョセフ・スミスに啓示として私たちには教えられていました。

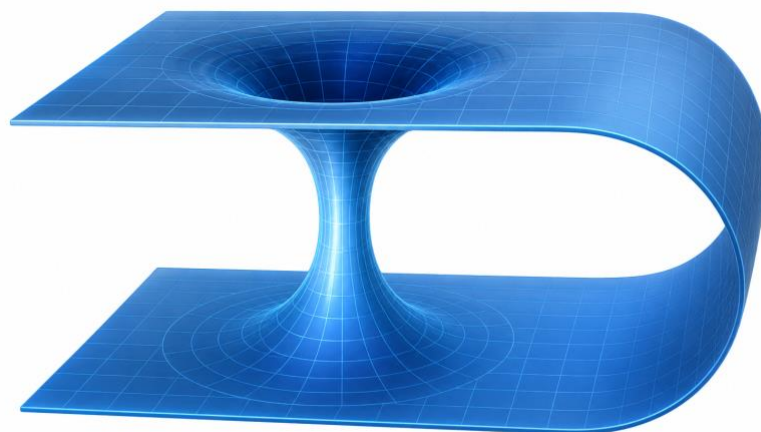
「『神の時、天使の時、預言者の時、人間の時は、彼らが住んでいる惑星によって計算されるのか』との質問に対する答えとして、わたしは、そのとおりであると答える。」(DC130:4-5)

「主は、ウリムとトンミムによってわたしに言われた。『コロブは、その回転による時と季節については主の場合と同じであり、その一回転は主の計算の方法によれば主の一日であって、それはあなたが今立っている星に定められた時によれば千年である。これはコロブの計算による主の時の計算である。』」(アブラハム 3:4、5-9 も参照)

そこでとても面白い時空を突き破るような天体の存在を人間はすでに発見しています。それはブラックホールという存在です。先程、ゴムシートの上ではより重い物体はより深く沈むという話をしましたが、ブラックホールはその典型的なもので、あまりにも重すぎて、深く沈みすぎ、その姿も見えないばかりが、光までも取り込んで逃れることができなくなるという存在です。消えて無くなったわけではありません。存在しているけど、まるで宇宙に空いた穴のようになっているのです。



ここで最初のワームホールの話に戻ります。これはあくまでも数学上の話で、もし時空がゴムシートのような空間であれば、ゴムシートを折曲げて、重なった部分に穴を開ければ2つの離れた場所は一瞬にしてつながって、行き来できるのではないかという考え方です。



でもちょっと待って！なぜ物理学ではゴムシートの「裏側」を考えずに、表と表を重ねることを考え出してしまったのでしょうか？その答えは簡単です。それは物理学というのはあくまでも検証することのできる事象をもとにデータ収集と計算に基づいて提唱される説の集まりだからです。たとえ時空の裏側が実際に存在していたとしても、そのデータの収集ができない限り計算もできないので、物理学としては認めるわけにはいかないからです（というよりも、学問としての範囲に入りきれない）。

ここで相対性理論をもとにする物理学にはある面白い想像上の考え方があることをお知らせしておきます。それはホワイトホールと呼ばれるものです。簡単に言えば、すべてを吸い込むブラックホールという天体があるのであれば、すべてを吐き出すホワイトホールという天体もあって、それはブラックホールの出口になっているという考え方です。

しかしこれは「物理学上の幽霊」と呼ばれる存在です。現在確認されているブラックホールの数は数百万個で、宇宙全体には数十京個（「京」は「兆」の1万倍）あるのではないかとされています。しかし、これまで見つかったホワイトホールは一つもないのです。

物理学の世界ではある意味、時空の裏側は同じこの時空ですから、自分たちの住む空間をたとえひっくり返しても学問上その外に出ることはできず、またこの世界に戻ってきます。もともと、この世界の他の世界があるという認識が存在しませんのでしかたのないことです。しかし、もしも私たちの住む宇宙の外があるとしたら・・・。

「天使たちはこの地球のような惑星には住んでおらず、彼らは神の前で、ガラスと火の海のような球体の上に住んでいる。そこでは、彼らの栄光のために、過去も現在も未来もすべてのことが明らかにされ、またそれらは絶えず主の前にある。神が住んでおられる所は、一つの雄大な『ウリムとトンミム』である。」(DC130:6-8)

話を戻しますが、もし神様が宇宙より大きな質量をお持ちだとすると、その空間は深く沈み、ブラックホールのような空間が耐えられない地点まで歪むと空間のゴムシートは破れて、その存在は空間の外側に行くこととなります。そこはこの宇宙の時間の流れとは全く関係のない世界ですので、外側からこの閉ざされた空間である宇宙を見る時に、神様の目にはある意味、「過去も現在も未来もすべて、絶えず主の前にある」ということとなります。

では終わりの日にこの地球がシオンになる時に何が起こるのかを想像してみてください。

「問い。黙示録第四章六節でヨハネにより述べられている**ガラスの海**とは何か。  
答え。それは**聖められた、不滅かつ永遠の状態にある地球**である。」(DC77:1)

「この地球は、**聖められて不滅の状態になると、水晶のようになり**、そこに住む者たちにとって一つの「ウリムとトンミム」になる。そして、これによって下位の王国、すなわち低位のすべての王国に関するすべてのことが、そこに住む者たちに明らかにされる。また、この地球はキリストのものとなる。」(DC130:9)

全宇宙よりも強大なエネルギーを神の栄光として身に受けられたイエス様がこの地上に現れる時、私たちを覆う幕が取り去られると、地球は瞬時にして焼き尽くされます。そしてこの地球はガラスの海のようになり、イエス様の栄光に耐えられるような姿に生まれ変わります。

「それゆえ、地球は日の栄の栄光に備えられるように、すべての不義から必ず聖められなければならない。地球はその創造の目的を達した後、栄光、すなわち父なる神の臨在を冠として与えられるであろう。それによって、日の栄の王国に属する者たちが、とこしえにいつまでも、

これを所有できるようにするためである。この目的でこれは造られ、創造され、またこのために彼らは聖められるのである。」(DC88:18-20)

昇栄した地球は神の栄光を受け、すなわち無限のエネルギーを有し、無限のエネルギーを持つ者たちの所有となりますので、物理学上、無限の質量を持つこととなります。すると、その重さの故に時空のゴムシートは深く沈み、やがて破れて別空間に飛び出て光を永遠に放つ、まるでホワイトホールのような存在になります。地球が沈んで飛び出した後の宇宙空間には深くて暗く光さえも逃げ出すことのできないブラックホールという存在が残ることになるでしょう。

「**無数の世界を、わたしは創造した。また、わたし自身に目的があってこれらを創造した。**」  
(モーセ 1:33)

宇宙中に数え切れないブラックホールが存在するのはもしかすると、その名残なのかもしれませんね。

もしも、宇宙空間の外に別の世界があるのであれば、それは全く異なる元素が存在できる、それこそ「永遠の世界」です。ここには私たちの全宇宙で **94 個**しか存在しない、やがて崩壊してしまう永遠には続かない元素ではない「**永遠の元素**」が存在することでしょう。その元素で構成される肉体は永遠であり、もはや離れることも滅ぶこともありません。

「さて見よ、わたしは死すべき体の死について、また死すべき体の復活についてあなたに語ってきた。わたしはあなたに言う。**この死すべき体は不死不滅の体によみがえる。死から、すなわち第一の死から命に移り、すべての人がもう死ぬことはあり得ない。彼らの霊は体と結合して、決して分離しない。**このように相合したものは、霊的な、不死不滅のものとなり、**彼らはもはや朽ちることがない。**」(アルマ 11:45)

さて、私の 2 つの質問に対する自分の納得のいく仮説ができたところで、途中で説明した「この重さがあるゆえに、神様は空中に立つことができ、空間を自由に行き来することができるのです。」という現象を説明したいと思います。

ゴムシートで説明したように、時空は質量によってひずんだり、ゆがんだりすることが証明されています。数学的にはこれを自在に操ることも不可能ではないのですが、私たちの手に入る範囲ではそれを実行するための「重さ」と「エネルギー」と「材料」が存在しません。しかし、神様がこの宇宙よりも重い存在であれば、そして無限のエネルギーを保持し、光の速さよりも早く動くことがあれば、ゴムシートの中と外を自由に行き来することができます。それはまるで、瞬時にある場所から別の場所へ移動するように見えることでしょう。また同時に時間を行き来すること可能になり、預言者に将来起こることをお見せになる事もできるようになると思います。

そして、時空を自由に曲げることができるようになると、重力を別方向に動かし、調整することができるようになります。つまり、空中に立つことも、ゆっくりと天に昇り降りすることも自由にできるということです。

以上が、私がイザヤ書を研究中に思いついた疑問とそれに対する物理学上の考察です。あくまでも、現時点で人間が知る限り、知識の到達している限りの範囲での考察になります。私が信じているのは神様の知識と御心はこれを遥かに凌ぐのもので、きっと私たちがまだ知らない素晴らしい知識が溢れているのだと思います。それでも、少しでもそれに近づこうと、先人たちの努力の結果をもとに神様の存在を科学的に証明しようとして聖典を研究することは私にとっての喜びであり、感謝でしかありません。

「この光は、広大な空間を満たすために神の前から発している。これは万物の中にあり、万物に命を与える光であり、万物が治められる律法、すなわち御座に着き、永遠の懐にあり、万物のただ中におられる神の力である。」(DC88:12-13)

黒木俊宏  
2026年5月4日